

関西の3市で「まちづくり」の取り組みを視察

上越市議会総務常任委員会



西宮市での視察



奈良市での視察

識した取り組みは確かに重要ですが、内容面では、政策立案や住民投票制度、協働事業の提案などが入っていたものの、あまり目新しいものがありました。せんでした。

今後、行政と市民などが一体となった取り組みが多くなっていくだけに、こうした条例制定は増えていくものと思えます。ただ、私は、こうした条例制定よりも前に自治基本条例を制定した方がよかつたのではと思いました。そうでないと、まちづくり全体の方向性が見えないし、議会の役割も明確にならないからです。

「事業仕分け」の難しさ実感

2日目の視察は奈良市。同市が昨年度、今年度と二度にわたって実施した「事業仕分け」について説明を受け、意見交換をしてきました。

「事業仕分け」は厳しい財政状況のなかで効率的な行政運営をめざすための手法のひとつですが、視察では、「外部の視点での議論を通じて」事業の要・不要などを仕分けの難しさを感じました。そもそも、市外の専門家などが事業のことを十分把握できるのか、30分や40分の議論で正しい判断が出来るのか、大いに疑問を感じました。

実際、昨年度の事業仕分けで「不要」と判定されながら、今年度の予算編成では「改善しながら実施」扱いとなった事業が7事業もあったのです。この他、「事業仕分け」の対象事業をどのように選ぶかについても、説明を聴くかぎりでは簡単ではないと思いました。市民が「これ

を対象にしてほしい」としてほしいとした事業をどう絞り込んでいくのか、その客観的な基準がまだ確立されていないと思えました。

顔の見える範囲で地域自治推進

3日目は大阪府池田市でした。池田市での視察は、同市の「地域分権の推進に関する条例」について学ぶことが目的です。

ここは初日に視察した西宮市と違い、自治基本条例を持ち、そのなかで地域分権を推進しようという自治体です。小学校単位の地域で必要な事業を提案してもらい事業を実施していくという制度にしてみました。

市の面積が全体で22平方キロメートル。その狭い面積のなかで人口は約10万人です。顔の見える範囲で地域自治をということ、同市が小学校単位で「コミュニティによるまちづくりを」進めているのはすばらしいことだと思えます。ただ、実際に取り組んでいる事業の中には街路灯強化事業、AED設置事業など本来市が取り組むべきことがいくつもありました。

総務常任委員会では今回の視察で学んだことを整理し、市政への提案としてまとめていく予定です。

市議会総務常任委員会（飯塚義隆委員長、12人）は4日から3日間、行政視察に出かけてきました。

まちづくりの方向性があれば…

初日は兵庫県西宮市です。西宮市に出かけたのは、同市が昨年4月に施行した「参画と協働の推進に関する条例」について学ぶためです。「参画」というのは、市民などが政策立案、実施などに自主的に参加することをいい、「協働」とは、市民などと行政がまちづくりにおいて共に行動することをいいます。「参画と協働」によるまちづくり」に焦点を絞った条例制定は全国でもあまり例がありません。それだけに、制定の背景や中身に関心をもちました。

同市がこの条例を制定した背景には、阪神大震災をきっかけに行政と地域住民が一緒になって何かできないかを考える機運が高まったことなどがあつたといえます。市民参画、協働を意



ツリガネニンジン、可憐！

小さな淡紫色の鐘形の花、ツリガネニンジンがあちこちで咲いて道路にたれさがっています。ここは柿崎区と柏崎市をつなぐ小村峠です。帰省客などが車を停めて花を見る姿も見られました。

父が旅立ってから一年四カ月が経ちました。葬儀後まもなく、次男が家から離れました。家族が二人も減ってしばらくさみしい思いをしました。それも時の流れとともに薄らぎました。ただ、お盆を迎えると、どうしてもさみしさを感じます。

今年のお盆は猛暑が続きました。そんななかでわが家の庭にある百日紅（さるすべり）が今年も元気にピンクの花を咲かせました。それもいっぱい。おそらく、来月の上旬までは咲いてくれるはず。この花が咲いたことで、父が生きていた頃のことを次々と思いだすことになりました。

父の入院生活が九か月目に入った頃のことです。この頃はまだ父の発する言葉をなんとか聞き取れました。口から食べ物、飲み物はいつさいダメという中で、家への思いは募るばかりだったのでしょね、父は時々、「家に帰ろさ。いっぱいやるさ」と言いました。短い言葉で弱弱しく言うので何をしゃべっているのかわからないことが多かったのですが、この言葉だけはハッキリとわかりました。

家に連れて帰りたいのはやまやまでしたが、医者の許可が出るはずがありません。それで、少しでも父の気持ちに伝えてやりたいと思い、まず実行したのは、病院の中から尾神岳を見せてあげることでした。方角がまったく違うので病室からは無理。廊下から尾神岳の見える場所がありましたので、そこまで車椅子に乗せて行きました。自分が生まれ育ったふるさとの山は、ふるさとから離れた地で見ると、それだけでうれしくなります。元気が出ます。「ほら、あれが尾神岳だよ」そう言う父はゆつくりとうなずきました。

しかし、父は、尾神岳を見るだけでは満足しませんでした。その後も「家に帰ろさ」を繰り返しました。それで次に考えたのは、わが家の写真を父に見せることでした。なるべく最近の写真をと思い、デジカメに撮ったのはわが家の木戸先の百日紅です。ピンクの花がちょうど満開となっていました。写真は手前に百日紅の花を入れ、バックにはわが家が大きく写るようにしました。

現像した写真を見せ、「ほら、じちゃ、きょうはいいもの持ってきたよ」と声をかけると、父は「おらちか」と訊（き）きました。「そうだよ、おまんが建てた家だよ。お医者さんから帰ってもいいよと言われるまでがんばるんだよ。その時にはちゃんと連れて行ってあげるすけね」と答えました。

写真をじつと見ていた父。涙を流すことはありませんでしたが、よほどうれしかったのか、「おれ、唄、うたうわ」と言って、ベッドで寝たまま、「米山さんから雲が出た」と始めました。柏崎の民謡、三階節です。「いまに夕立が来るやら、びっから、ちやつから、どんがらりんと…」父の三階節はそこまで終わってしまいました。でも、よくそこまで唄ったものです。

百日紅の花が入ったこの写真はその後、病室の引き出しの中に入れておき、何度も父に見せました。病室で父が唄った民謡はこの三階節と佐渡おけさ、炭坑節の三つ。きっかけはこの写真を見てからだだったと記憶しています。

先日、庭の真ん中に立ち、たくさんのお花を咲かせた百日紅の木を見ました。父に見せ続けた写真では家がバックに写っていたのですが、この方角はそれとは正反対です。百日紅のバックには真夏の青い空が広がっていて、白い雲がゆつたりと流れています。それがとても新鮮で、なぜか心が弾みました。



盆踊り復活へ貴重な一歩

回し続けていたら、すっかり濡れてしまいました。私のホームページに動画で「十三夜」の唄と踊りを載せましたのでごらんください。

南砺市議会から視察が

ありがたいことです。私も執筆陣のひとりとなった『山村集落再生の可能性』

（自治体研究社）を読み、私の考えを聞いたり、意見交換したいと富山県南砺市議会、「なんと市民の会」の3人の市議さんたちがわざわざ上越市まで出かけてきてくださいました。

南砺市は市域の8割が中山間地。高齢化が進み、集落機能を維持できなくなっているところは上越市と同じです。中山間地集落をどう見ているか、再生に向けてどうすべきかなどについて2時間ほど一緒に勉強させてもらいました。



吉川区観光協会主催の納涼盆踊りが14日、スカイトピア遊ランドで行われました。グラウンドに櫓を造っての盆踊りは本格的なものです。途中から、あいにく雨降りとなりましたが、集まった人たちの心は懐かしさでいっぱいになりました。

盆踊りは夕方から。いつ雨が降るかわからない状況の中でも120人ほどの人たちが集まりました。片桐令司観光協会会長の挨拶の後、佐渡おけさ、炭坑節と踊り、十三夜まで踊りがすすんだところで雨脚が強くなりました。踊りの輪は小さかったものの、盆踊りの雰囲気は十分味わうことができました。長谷川和作さんの唄は、83歳とは思えないほど張りがありました。それと長谷川勉さん、橋爪宏さんの太鼓、老川チヨ子さんなどの踊りも良かったです。

今回の盆踊りで私は、久々に見る十三夜をカメラで記録したいと思っていました。雨が降ってもカメラを